

【ねがいはしては】

令和5年9月10日

KYOWA SCHOOL

第400号

「信頼の有無」

勉強が嫌い、または苦手になっている子たちに多くみられるのが「他を過剰に意識する」というものです。

私がこれまで出会ってきた子どもたちを2つの派に分けるとします。「淡々」派と、「キョロキョロ」派です。

「淡々」さんたちは実にマイペースであり、わが道を左右されることなく常に一定速度を保ちながら歩んでいるように思います。その子たちは少々物音や周囲の変化に全く「気」をとられることなく、いつもニコツとしていることが多いように思います。つまり常に「安心」の中で生活しているといった感じです。片や「キョロキョロ」さんたちです。ほんのわずかな物音や変化に非常に敏感であり、その目はじっとすることなく、野生の世界でいえばミーアキャットやガゼル、インパラといった常に集団で生活する動物たちのようです。常に周囲に注意を払い、危険を察知し種を守らねばなりません。そこに「安心感」は存在しません。自然界における弱者の本能です。周りはずべて敵かも・・・。

では前者と後者では何が差となっているのか、同じ生活の場にながらなせ心の置き方に差が生じてしまうのか。かれらそれぞれの「人への意識」に原因があるのかもしれませんが。生活の場はおおきく分けて2カ所に絞られます。「学校」そして「家庭」です。そのこころの位置です。「安心」か「不安」かです。安心ですと「淡々」、不安なら「キョロキョロ」です。そこから想像されるのが「信頼」の有無です。

子どもはたった一つの刺激でこころにカギをかけてしまうことが多々あります。

これはもう30年ほど前のことなのですが、小学2年生の児童のことになります。算数に少々苦手意識を感じ始めていたらしく、「ひょっとしたら、私は『ダメな子』かもしれない」という疑心に駆られ出しました。そこで彼女の取った行動は、学校からの宿題をじっくり丁寧に行うというものでした。同じ問題でも2度行うなど、取り組み方は天才的です。小2でしかもひとり取り組み方を決定できることはすごいことです。しかしある日、その子がその宿題を自宅で行っていったところ、母はあまりにもスローな我が子を見かねて、つい強い調子で叱ってしまったそうです。それまで勉強で叱るなどなかった母の口から「意外なことば」が発せられたことでその子の中に強い衝撃が残りました。つまり「トラウマ」です。

その子は私のところで机に向かう時、以前は算数が多かったのですが、そのうち国語にシフトし始めました。しかしある日私にこう言います。「私ね、さんすうが一番好きなの・・・。」私はそれを聞き、「そうなんだ。でもね先生は知っているよ、〇〇ちゃんが算数が一番こわいことをね・・・。」すると、その子はいきなり大粒の涙を流し始めました。その涙は止まることを知りません。私は気になり、その件を手紙にしたためお母さんに渡しました。翌日朝、電話がかかってきました。「わたし、昨夜は一睡もしていません。娘がこんなに苦しんでいたことを知りませんでした。ある日、たった一言ですけど強く叱ったことがありました。それをずっと気にしていたんですね。しかもそれを知られまいとして・・・。」

お母さんも電話の向こうでずっと泣いています。その後、その母子は、徐々に信頼を回復していきます。

それまで、「信じられるものなどこの世界にはなにひとつないんだ」と思い込んでいたその子のこころは、やがて以前の大好きだった母のぬくもりの中へと戻ることができたのです。それは母が子に絵本を読み聞かせしている光景です。お母さんは絵本を読みながらその中へと入りこんでいます。お母さんは笑います。そして子も笑います。お母さんが涙ぐみます。子も涙ぐみます。親子はひとつになります。その瞬間、親と子は互いの深い愛情によって庇護されています。

私は感じます。きっと、「淡々」と向かっている子は、絵本の時を感じているのかな。

私は感じます。きっと、「キョロキョロ」と向かっている子は・・・。

子は他人を意識するあまりに大切なこころの位置を知らずのうちに見失いがちになります。その「キョロキョロ」を取り去ってくれる方が身近にいらっしやいます。

「たくさん まちがえる きみは すてき たくさん しっばいする きみは すてき いいの いいの
それが いいの たくさん 前に すすんでいるよ」 絵本 (いぬい さえこ著 きみのことがだいすき) より

ほかにもたくさん「子があたたかくなることば」があります。そうなんです。ことばは魔法の力をもっています。子はいつでもおかあさんから魔法の言葉を受け取りたくてワクワクしています。人生失敗の方がはるかに多いことは大人のほうがわかっているはずですが。それを承知の上で「子には失敗はさせたくない」というのは、理に通じていません。

我が子が多くの失敗や間違いを経験したときに、いかにして子を元気にしてあげられるか、いかにして味方であることを知らせてあげられるか・・・。

けっこう気がつかずにいることってあるんです。それは、親が「どうしよう」って、つい思ってしまうことです。子がとんでもない点をとってしまったとき、ついつい出てくる親が感じる「どうしよう」です。これは次の段階で危険なものを生み出します。『感情』です。その『感情』は、子から信頼を奪い取ります。絵本で育んだ「安心感」はどこかへと飛び去ります。子はひとりぼっちになります。助けてあげられるのは・・・。